

伊野川から忠別川までの地名②1

ノチウとオサラッペ川(上)

前号では、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が報文日誌の「再篤石狩日誌」に記載した「ノチウ(nociw星)の絵を紹介した。写真①の絵は、その元になった野帳(フィールドノート)『巳第二番』に描いたノチウ(nociw星)のスケッチである。このスケッチでも、オサラッペ川が、ノチウの川下で、石狩川に合流していることが分かる。

実は、オサラッペ川の川口、すなわち、石狩川との合流点の様子で、オサラッペ川の地名解釈が変わってくるので、このノチウ(nociw星)の位置が重要になってくるのである。

不思議なことに、永田方正や知里真志保の地名解に、このノチウは掲載されていない。また、明治三十一年製版の

『北海道仮製五万分一図』にも記載がない。これらは永田地名解を元にしてるので、ノチウが記載されないのだった。

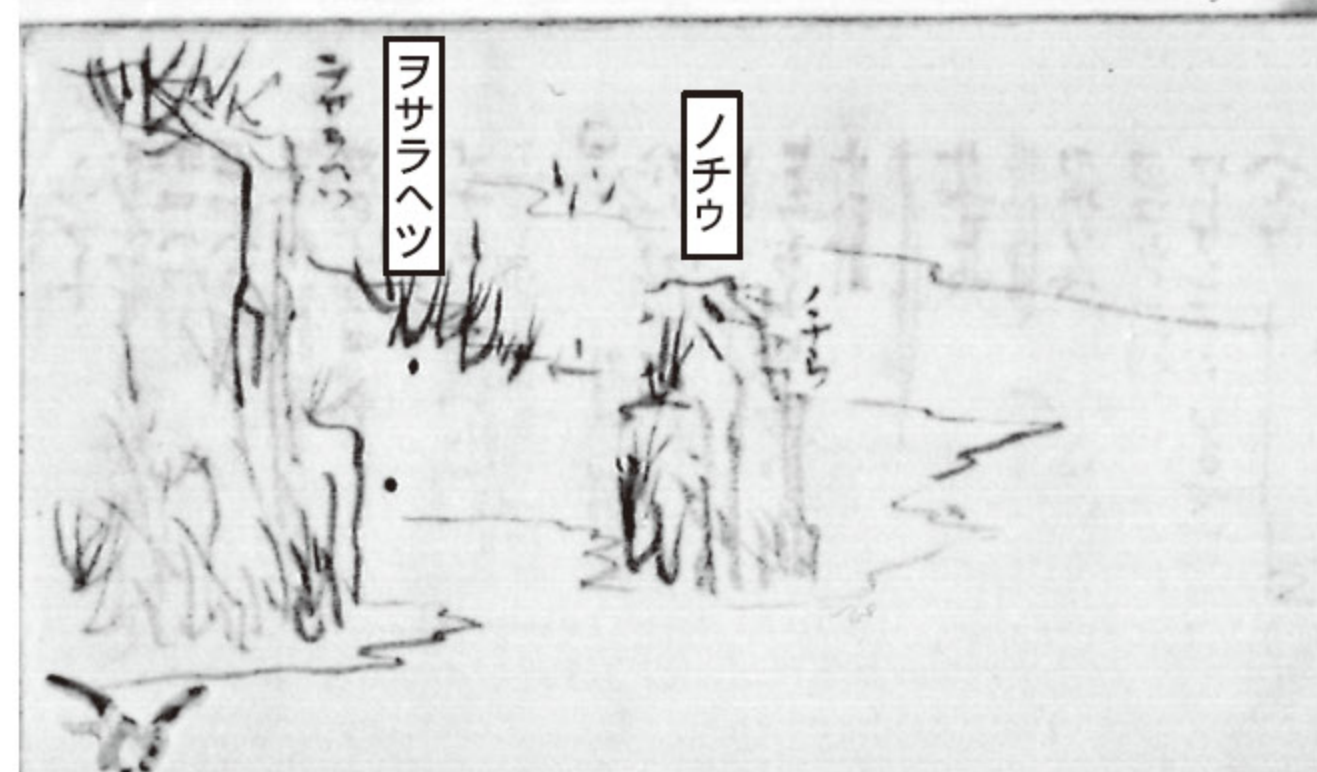
永田方正の時代には、松浦武四郎の右の二書は見ることは不可能だったので、明治二十三年の現地調査では、ノチウ伝説を聞くことが出来なかったことが推測される。

さて、明治三十年生まれの砂沢クラさんは、母親のムイサシマツトさんから、ノチウ伝説を次のように伝えられている。

オサラッペ(ヨシ原の間を流れる川)の出口のところには、天まで届くよ

この岩を「ノチウ(星)」と呼んでいました。

母が小さい時には、天にまで届くかと思うほど大きかったそうだが、私が見た時にはずいぶん小さくなっていました。(『私の一代の話』)



写真①

のである。

ムイサシマツトさんが伝承したノチウ(nociw星)伝説は、前回紹介した、明治二十一年九月二十三日の『北海道毎日新聞』記者の野中掬泉の「此処河畔密林の中、一大巖あり。アイヌ之れを隕星石と称して尊崇す。」と同じように、「ノチウ(nociw星)＝隕石説であった。

また、母親のムイサシマツトさんが見たノチウは、「天まで届くほど大きかったようですが、砂沢クラさんが見たノチウは、「ずいぶん小さくなっていました。」と述懐されている。

砂沢クラさんが書かれたように、このノチウは、いつどのような状況で見ると、随分と印象が異なるも



写真③

写真②

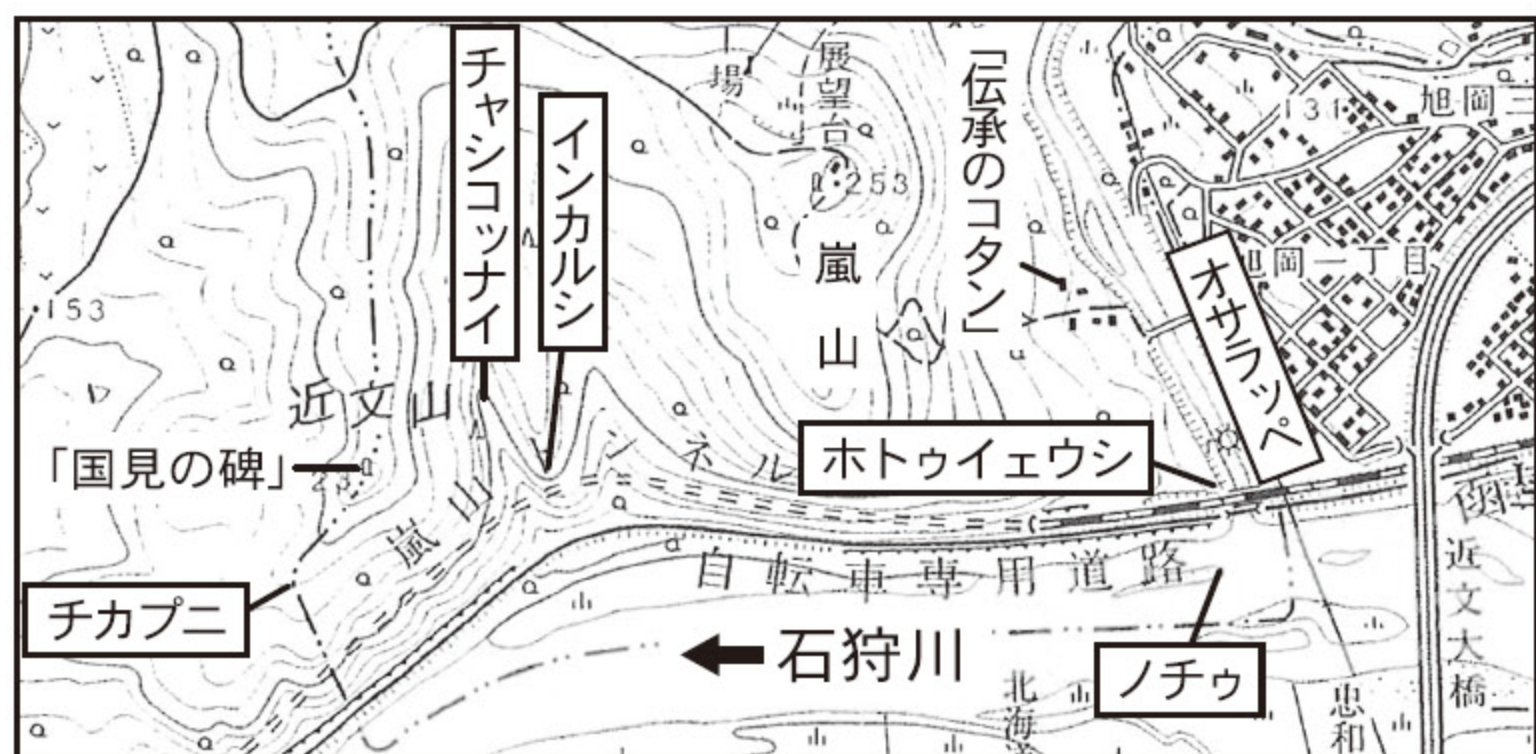
写真②は、昭和六十三年七月、四人乗りのゴムボートで石狩川を下った時に、ノチウ調査をした時のものである。ノチウの中段に高校生三人が立っているが、野中掬泉の表現した「一大巖」「巨巖」にふさわしい伝説の岩である。他方、写真③は、サイクリングロードの若草橋から、ノチウを写したものの。平成二十六年の撮影だが、砂沢クラさんが書いたように、「ずいぶん小さく」見える。

写真①の松浦武四郎のスケッチのように、オサラッペ川は、ノチウの下流で石狩川に合流していた。このことで、オサラッペ川の地名解はどのようになるのか、次号で見ていきたい。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

132

高橋 基



うな背の高い岩があったそうです。ある時、星が落ちたので、みなで走って見に行くと、この岩が立っていたので、村の人は

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します